

インドシナ旅日記-9

わたしが外国旅行先を選ぶとき、観たいものもさることながら実は食べ物に期待しています。その意味ではカンボジアにはあまり期待していませんでしたが、熱帯性の果物類を除くと予想通りでしたが、その中で意外にもお米だけはわたしの好みに合うものでした。

9. 「はるかない稲作の道」

カンボジアの3日目は朝食後、まずバンテアイ・スレイに行ったのですが、遺跡の入り口に田んぼがあり、稲がこうべを垂れ始めていました。前回でも書きましたが、この国のお米は長粒種のインディカ米です。日本ではタイ米が知られています。もちろんカンボジアだけでなく南アジアの人々の主食ですから、それぞれの国の食べ方はその国なりに洗練されています。

コメはまずアフリカ米とアジア米に分けられ、アジア米がまたインディカ米、ジャワ米とジャポニカ米に分かれます。品種改良のためにそれぞれの品種間の交配も行われますし、自然界で交雑することもありますので、今では数えきれない品種と、それに伴って大きさや長さ・太さの違いがあります。日本のコメは1万年くらい前に中国南部から伝わったとするのが有力な説になっているようですが、わたしはちょっと違う見方をしています。

わたしは高校の時にコメがもっと南の方から、海側をインドネシア、メコン河河口域、ボルネオ、フィリピン、台湾を伝って来たという小論文を書いたことがありました。その時、根拠にしたのは最近、改良品種の飼育がブームになっている絶滅危惧種のメダカです。



所謂、インディカ米です。日本ではタイ米と総称されています。粘り気が少なく、日本式のご飯や寿司(鮭)には向いていませんが、カンボジアでは主に白米を蒸したものを食べているようです。見た目も一緒ですし、わたしは美味しくいただきました。



メコン河の流域は東南アジア最大の米作地帯です。何せ水さえあれば一年中栽培が可能です。どこかの田んぼで田植えを押しながら、別の田んぼでは稲刈りなんてことが当たり前のできるのです。

ニホンメダカの学名は *Oryzias latipes* と言うんですが、お米の学名は *Oryza spp.* なんです。メダカの仲間は「稲のまわり(水田など)にいる」魚と呼ばれていることになります。

少しややこしいのですが、ジャポニカ米の南洋種にジャバニカ米(ジャワ島米の意味)があります。そしてメダカにもジャワメダカ(*Oryza javanica*)がいるのです。この2種は当然なのですがお互いによく似ていて、わたしでも詳しくヒレにあるスジ(条というのですが)数えなくては区別がつかないほどです。

しかも、メダカの親戚はボルネオ島やセレベス島、フィリピン、台湾にも生息しています。メダカ族(*Oryza* 属)の家族はととても大きいと

言えます。そして、そのメダカは学名のとおり稲のまわりにいるのですから、逆に言えば稲がないところにはメダカはいないとも言えます。もちろんメダカは中国南部にも海岸部



インディカ米の粳と玄米の形です。下のジャポニカ米の代表的な品種の形との違いは明白です。味や香りも日本のお米とは全然違いますが、これはこれ美味しいですよ。



カンボジア風のグリーンカレーを注文したら白米が付いてきました。インディカ米の中粒種を蒸したのですが、独特の香りがあります。わたしは好きですが日本人には少し抵抗感を持たれるようです。

には生息しています。しかし、メダカの分化と進出の過程から言えばメダカは南方起源であり、ジャワ島から海岸沿いに北上しているので、稲作が南方から北へ北へと広がったのでなくては説明が付きません。メダカは繁殖力は強いのですが、小さくて弱い魚なので、魚食する魚がいると増えることができません。メコン河、揚子江などといった大きな川や湖

にも生息はしていますが、その地方でもやはり水田や用水路などの方が住みやすいようです。ただ、その地域の稲作地帯ではカンボジアもそうですが、ほとんど例外なくインディカ米が栽培されているのです。時代はともかく品種の上では日本に伝わった稲作とは違います。メダカがインドネシア起源とすれば、同じコメでもメダカがついてきたのはジャポニカ米のはずです。

そこでわたしは縄文中期に日本で栽培されていたのは、黒潮沿いに北上してきたジャポニカ米の南洋種ジャバニカ米で、弥生時代に本格的な水田栽培が始まった時のコメは中国南部から伝わったジャポニカ米だったという仮説を立てたという訳です。遠い50年も昔の楽しい思い出です。つい脱線してしまいました。

それにしてもシェムリ



日本でも最近では地中海料理やエスニック料理の食材用、あるいは醸造用や飼料米用にと品種改良が進み、インディカ米系統や中にはアフリカ米系統の品種も栽培されるようになりました。(ウィキペディアより)

アップ周辺の遺跡の背景には、豊かな生産性を保障した稲作があったことは否めません。その稲作の生産性を保障しているのはメコン河であり、メコン河の季節による水位の上下と、それを調節する機能をもつ天然の遊水地（洪水調節地）である、トンレサップ湖です。古代からカンボジアがヴェトナムとメコンデルタの争奪戦を繰り広げてきたのも、タイが何度もカンボジアへ侵攻したのも、そのモチベーションの全てはメコン河流域の豊かな生産性を得ることだったことを重ね合わせて遺跡群を見ると、人間の営みの愚かさ儂さが身に染みてきます。